

# 沖繩歸郷始末記

山之口獮

青空文庫



三十五年ぶりで郷里に帰り、ついこのごろになつて帰京した。

沖繩での滞在期間一カ月に限られているところの岸信介大臣の証明する身分証明を懐にして行つたのであるが、沖繩へ行つてみると、色々の事情が次から次へとできて、さらに現地での滞在を一カ月のばしてもらつて満二カ月を過し、往復ともに一カ月半ほどで東京に舞い戻つたわけである。

三十五年ぶりに郷里へ帰るとはいつても、なにもその三十五年ぶりを、ぼく自身が特に強調したのではなかつたのであるが、何年ぶりの帰郷なのかと相手にきかれるので、そのように答えたまのでのことなのであつた。しかし、沖繩が、現代の国際情勢のもと

で、世界の注目するところのものであることから、沖繩出身のぼくのことまでが、自然周囲のうわさにのぼったにちがいない。それに、貧乏詩人だということまでが手伝つてのこともあつて、盛大な歓送会があつたり、饞別にしては世間をびっくりさせた程のものをいただいたり、おまけに、新聞、雑誌の上でも騒がれたのである。こんなことが、沖繩の現地にも強く響きわたつたのかも知れない。

那覇の泊港に船が横づけになつたとき、岸壁の群衆は大きな幟までおし立てて迎えてくれたものである。紺地に白で「バクさんおいで」と大書されたもので、中学のころの旧友がすでに白髪の毛をして、その幟を両手でかかえているのである。三十五年ぶり

とはいえ、錦を着て帰ったのでもないのにと、ぼくはおもわないではいられなかったのであるが、貧乏詩人の、その貧乏が、ぼくの錦ではないのかとおもいなおし、感激をあらたにした次第なのであった。

東京をたつ前に、ある雑誌と二、三の新聞の原稿をたのまれていたのであるが、どれ一つとして現地でそれを書くことができなかった。なかでも、ある新聞からは第一信をと念をおされたのであったが、義理をはたすことができず、従って、外のも不義理の結果になってしまったのである。帰るところになって次第にそのことが気になり、一信だけでも、船のなかで書かねばなるまいともい、それを大阪に着いてから、速達で送ってぼくの帰京より一

足でも先に東京の新聞社に間に合わせるつもりでいたところ、どういうものかひどくペンが重たくて、それもついに全うすることができず、帰りを急ぎながらも、そのために三晩を大阪の旅館でぐずついでしまったのである。ところが書けないとなると書けないもので、ついにそのまま東京に帰りついたのである。

だが、真先に、女房とこどもからの抗議なのである。旅行先から、一枚のはがきさえ便りも寄越さなかつたからなのである。なにしろ、述べたように、頼まれた原稿など、何一つとして一行さえも書けないで、鬱々とつづいているところなので、一枚のはがきのことから、つい妙なことになってしまった。

女房は顔を赤くして怒り、「よつぽど、搜索願を警察に突き出

してやろうかとおもった」と向うむきのまま云ったりしたのである。あとでの話によると茨城にいた義兄が、新聞でぼくの沖繩行を知り、「まさか、行きつきりになるんじゃない」と、その義弟に不安をもらしたとのことであるが、女房側の親兄弟の間では、はじめからぼくのことを遠いところの人であるとして、それを気にしているようで、亡くなつた義母も、「遠いなあ」と云つて、ぼくらの結婚に一抹の不安を持っていたことなどおもい出すのである。なにしろ一カ月の予定が二カ月にのびたのであつたら、そのことだけでも一本のはがきは出せる筈なのに、と彼女はぐちをこぼした。

さて、折角、東京に帰つて来ても、外出することができないの

である。帰京のあいさつをしなくてはならないのであるが、約束の原稿が気になるのである。相手の方ではあきらめていにして、またもういらなといわれるとしても、原稿を持って行つての上でなら、こちらをあきらめがつくわけで帰京のあいさつを後回しにしてその原稿をまず書くことにしたのである。

しかし、六、七枚書いたが、気にいらないので、別にまた書いたら十枚位になつてしまつたがそれも読み返してみると、どうもおもしろくないので、また別に書き出したのである。それがまたなかなかすすまないのである。書き上げ次第、帰京のあいさつも出すつもりで、これは印刷もでき上つていて、机の上で出発を待っているのであるが、ぼくの原稿はまだできないのである。



そこへ、本紙のY氏があらわれた。仕方がないので、机の上のあいさつ状を一枚手渡したのである。やがて、「随筆」を、このことなので、一信の原稿も書かないうちに沖縄のことかとおもつて戻込みしたが、まあ最近の心境みたいなものというわけなのであった。

（「産経新聞」一九五九年二月二七日）



# 青空文庫情報

底本：「山之口貌詩文集」講談社文芸文庫、講談社

1999（平成11）年5月10日第1刷発行

底本の親本：「山之口貌全集 第四卷」思潮社

1976（昭和51）年9月19日

初出：「産経新聞」

1959（昭和34）年2月27日

入力：kompass

校正：門田裕志

2014年1月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 沖繩歸郷始末記

山之口貌

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>